

吉備国際大学研究紀要
(医療・自然科学系)
第27号, 11-19, 2017

複数の病院での母性・小児看護学実習経験を共有する 合同カンファレンスでの学び

安達 直子・安福 真弓

Student Nurses' Satisfaction with their Experience at a Joint Conference on Maternity and Pediatric Nursing

Naoko ADACHI, Mayumi YASUFUKU

Abstract

Purpose:The purpose of this study was to clarify nursing students' satisfaction with a joint conference on maternity and pediatric nursing

Methods:This study was conducted between February 2015 and February 2016. Anonymous, open-ended questionnaires were distributed to 125 students on the day of a joint conference on maternity and pediatric nursing. Completed questionnaires were collected after the completion of the conference. Data were analyzed using the chi-square test. The protocol of this study was approved by a research ethics committee.

Results:Valid responses were collected from 118 students (collection rate, 95.2%; 88 women, 30 men). Overall, 35 students were training together at the same hospital, while 83 students were training together at another hospital. Among the 117 (99.2%) students who provided a response to the statement "my participation deepened my understanding", 70 (59.3%) responded [I really think so] and 47 (39.8%) responded [I mostly think so]. Among the 115 (97.5%) students who provided a response to the statement "the activities and materials were interesting", 63 (53.4%) responded [I really think so] and 52 (44.1%) responded [I mostly think so].

Conclusion:The results of this study demonstrated that the conference was considered to be instructive by the student nurses.

Key words : Student nurses, Joint Conference, Maternity Nursing, Pediatric Nursing

キーワード : 看護学生、合同カンファレンス、母性看護学、小児看護学

吉備国際大学保健医療福祉学部看護学科
〒716-8508 岡山県高梁市伊賀町8

*Department of Nursing, School of Health Science and Social Welfare, Kibi International University
8, Iga-machi Takahashi, Okayama, Japan(716-8508)*

1. はじめに

現在、保健師助産師看護師学校養成所指定規則により母性看護学実習と小児看護学実習は、各2単位（90時間）の履修が定められている。しかし、実習施設確保は困難である^{1) 2)}と考えられる。看護基礎教育機関では、母性と小児は複数の実習施設で臨地実習を行っていることが推察される。また、1990年度カリキュラム改正により母性看護学の教育内容は男女同一となり、男子看護学生の母性看護学実習も必修となっている。2015年厚生労働省医政局看護課長通知¹⁾では「……母性看護学実習及び小児看護学実習について実習施設確保が困難であり、……臨地実習の取り扱いを改めて周知するとともに、実習例を示す……」と述べ、「臨地実習に関連したカンファレンス」は実践活動外学習として、臨地実習を充実させることを目的とし、提示されている。

その背景の中で、付属の実習病院を持たないA大学では、母性看護学実習及び小児看護学実習の実習病院は平成24年度までは2カ所であった。しかし、学生定員増などの為新たな実習病院確保をし、実習病院数は年々増加した。その結果、平成27年度は母性看護学では6病院(6病棟)、小児看護学では4病院(5病棟)となった。母性・小児看護学実習が同一病院であったのは、そのうち4施設であった。

複数の病院に分散して実習することにより、学生個々の各病院での実習経験内容には違いがある。そのため、実習病院により異なる経験をしている母性看護学実習と小児看護学実習の学びを振り返り、実習経験を共有するために、平成26年度より母性・小児合同カンファレンスを行っている。今回、平成26年度及び平成27年度の合同カンファレンスにおいて、実習での学びを共有し深めることができたので報告する。

2. 目的

3年次のすべての実習終了後に実施した母性・小児看護学実習合同カンファレンスでの学びを明らかにする。

3. 母性看護学実習及び小児看護学実習病院と合同カンファレンスについて

(1) 母性看護学及び小児看護学の実習病院の推移

母性看護学実習及び小児看護学実習の実習施設は病院であり、実習病院数は平成26年度には母性看護学5カ所、小児看護学4カ所であり、平成27年度は母性看護学6カ所、小児看護学4カ所と増加した（表1）。小児看護学での4実習病院は、母性看護学実習での実習病院と同一であった。また、病棟は母性及び小児のそれぞれの単独の病棟や成人との混合病棟であり、病棟体制には違いがあった。また実習病院は広域化し、滝沢ら³⁾の「臨地実習施設までの通学時間は1時間以内の施設が望ましい」には適合せず、通学に1時間以上かかる場合もあった。

表1 実習病院数の推移

	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度
母性看護学	2	3	5	6
小児看護学	2	2	4	4

(2) 平成26年度

1) 対象と時期

3年次の8月末から翌年2月初旬までの期間は、11グループに分かれ、順次専門分野の臨地実習を行っている。そのため、3年次全体の臨地実習終了直後の2月初旬に母性及び小児看護学実習終了者を対象に、合同カンファレンスを実施した。

2) 日程と内容

日程は2日間とし、1日目は発表準備時間とし、グループ討議や資料作成を行った。実習グループ（1グループは5～6人）毎に実習病院での対象者の特徴や概要、

実習病院での受け持ちの事例や経験、心に残っていることについて討議を行い、発表準備を行った。グループワークの視点は提示したが、発表内容は統一せず、実習グループ毎に決めることとした。発表時間は母性及び小児看護学実習それぞれに120分とし、1グループは7分での発表とした。実習グループ(11グループ)は、病院順にパワーポイントでの発表と討議を行い、まとめを行った(表2)。

表2 平成26年度 日程・内容・方法

学生数(グループ数)	53人(11)
準備(討議・資料作成)	6時間
発表とまとめ時間	6時間
1グループの発表時間	母性・小児各7分
日程 (1日目)	実習グループ毎のグループワークと発表資料作成
(2日目:午前)	実習グループ毎の発表(小児)
(2日目:午後)	グループ毎の発表(母性)と全体のまとめ
内容(1日目)	グループ毎に以下の視点で討議し、発表準備する。また、発表内容が重ならないように学生が調整する ①各病院・病棟の入院患者・対象者の特徴や概要と看護ケアの実際 ②事例発表または心に残っていること ③病院・病棟毎にグループで発表する
(2日目)	①各病院・病棟の発表毎に、質疑応答の時間を持つ ②発表の司会進行は学生が行う

(3) 平成27年度

1) 対象と時期

3年次の母性及び小児看護学実習終了者を対象に、3年次全体の臨地実習終了直後の2月初旬に実施した。

2) 日程と内容

日程は2日間とし、1日目は発表準備時間とし、実習グループ(1グループは5～6人)毎に討議を行い、発表準備としてグループ討議や資料作成を行った。グループワークの視点は提示したが、発表内容は統一せず、実習グループ毎に決めることとした。発表時間は母性と小児それぞれに1グループあたり5分とし、母性及び小児看護学共に各90分で実習グループ(14グループ)毎に実習病院順にパワーポイントでの発表と質疑応答の時間を持った。

母性及び小児看護学実習の発表を午前中に行い、午後は実習グループではなく、各病院での実習学生を

混合し、討議と発表を行った(表3)。

表3 平成27年度 時間・日程・内容・方法

学生数(グループ数)	72人(14)
準備(討議・資料作成)	6時間
発表時間	6時間
1グループの発表時間	母性・小児各5分
日程 (1日目)	実習グループ毎のグループワークと発表資料作成
(2日目:午前)	実習グループ毎の発表(母性・小児)
(2日目:午後)	実習病院混合グループでの発表とまとめ
内容(1日目)	グループ毎に以下の視点で討議し、発表準備する。また、発表内容が重ならないように学生が調整する ①各病院・病棟の入院患者・対象者の特徴や概要と看護ケアの実際 ②事例発表または心に残っていること
(2日目:発表とまとめ)	①発表は母性、小児の順とし、施設毎に行う ②病院・病棟毎にグループで発表する ③司会進行は教員が行う
(午後)	①実習病院混合グループでの討議と発表 ②全体のまとめ ③司会進行は教員が行う

4. 研究方法

(1) 研究対象：A大学看護学科、平成26年度母性及び小児看護学実習終了者53人と平成27年度終了者72人の計125人である。

(2) 研究期間：平成27年2月～平成28年2月

(3) 研究方法

平成26年度、平成27年度、それぞれ3年次全体の臨地実習終了後、母性・小児合同カンファレンスを実施した。合同カンファレンス終了時に無記名自記式質問紙を配付し、回収箱にて回収した。調査内容は①基本属性②カンファレンスへの取り組み状況③グループワーク状況④発表での学び⑤カンファレンスの方法⑥自由記載等から構成した。

また中心化傾向を避けるため、[4.まったくそうである 3.だいたいそうである 2.あまりそうではない 1.まったくそうではない]の4件法で調査し、4件法と[4.まったくそうである 3.だいたいそうである]を“そうである”とし、[2.あまりそうではない 1.まったくそうではない]を“そうでない”とした2件法で分析した。

統計処理には統計ソフトSPSS 21.0 for Windows を用いた。

(4) 倫理的配慮

学生に口頭と文書の両方で、調査の目的、研究参加あるいは不参加は自由意思であること、参加しなくても学業成績には影響しないこと、データは研究目的以外には使用しないこと、研究が終了した時点で収集したデータは破棄すること、データは厳正な管理をして個人は特定されないこと等を説明し、調査票の回収をもって同意とした。平成27年度は吉備国際大学倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号15-50）。

5. 結果

(1) 平成26年度

回収数は47件（回収率88.7%）、有効回答46件（86.7%）であった（表4）。

表4 平成26年度 研究対象

配付数	回収数 (%)	有効回答 (%)
53	47 (88.7)	46 (86.7)

内訳は女36人、男10人、母性と小児で同一の実習病院だった学生9人（19.6%）、異なる病院だった学生37人（80.4%）であった（表5）。

表5 平成26年度 対象者の属性

N=46

属性	人 (%)
性別	女 36 (78.0)
	男 10 (22.0)
実習病院	同一 9 (19.6)
	異なる 37 (80.4)

「発表準備への取り組みは積極的だった」は「まったくそうである」25人（54.3%）、「だいたいそうである」20人（43.5%）であり、「まったくそうである」と「だいたいそうである」を2件法で“そうである”とすると、45人（97.8%）であった。「発表では学んだことが伝えられた」は「まったくそうである」18人（39.1%）、「だいたいそうである」25人（54.3%）であり、“そうである”は43人（93.5%）であった。

「グループワークではメンバーの一員として役割が果たせた」は「まったくそうである」27人（58.7%）、「だいたいそうである」18人（39.1%）であり、“そうである”は45人（97.8%）であった。「発表はグループで協力してできた」は「まったくそうである」33人（71.7%）、「だいたいそうである」13人（28.0%）であり、“そうである”は46人（100%）であった。

「参加して学びが深まった」は「まったくそうである」28人（60.9%）、「だいたいそうである」17人（43.5%）であり、“そうである”は45人（97.8%）であった。「カンファレンスの学びは有意義だった」は「まったくそうである」

表6 平成26年度 学生の評価

N=46

	まったくそうである	だいたいそうである	あまりそうでない	まったくそうでない	NA
	人 (%)	人 (%)	人 (%)	人 (%)	人 (%)
発表準備への取り組みは積極的だった	25 (54.3)	20 (43.5)	1 (2.2)	0 (-)	0 (-)
発表では学びを伝えられた	18 (39.1)	25 (54.3)	3 (6.5)	0 (-)	0 (-)
GWではメンバーの一員として役割が果たせた	27 (58.7)	18 (39.1)	0 (-)	0 (-)	1 (2.2)
発表はグループで協力してできた	33 (71.7)	13 (28.3)	0 (-)	0 (-)	0 (-)
参加して学びが深まった	28 (60.9)	17 (37.0)	1 (2.2)	0 (-)	0 (-)
カンファレンスでの学びは有意義だった	20 (43.5)	26 (56.5)	0 (-)	0 (-)	0 (-)
今後も合同カンファレンスは必要である	14 (30.4)	32 (69.6)	0 (-)	0 (-)	0 (-)
カンファレンスの方法は適切だった	18 (39.1)	26 (56.5)	1 (2.2)	0 (-)	0 (-)
発表準備時間は適切だった	30 (65.2)	10 (21.7)	2 (4.3)	1 (2.2)	3 (6.5)
合同カンファレンスの時期は適切だった	18 (39.1)	26 (56.5)	1 (2.2)	0 (-)	0 (-)

20人 (43.5%)、[だいたいそうである] 26人 (57.0%) であり、“そうである”は46人 (100%) であった。「今後も合同カンファレンスは必要である」は [まったくそうである] 14人 (30.4%)、[だいたいそうである] 32人 (70.0%) であり、“そうである”は46人 (100%) であった。

「合同カンファレンスの時期は適切だった」は [まったくそうである] 18人 (39.1%)、[だいたいそうである] 26人 (56.5%) であり、“そうである”は44人 (95.7%) であった (表6)。

自由記載では「他グループの学びを共有でき自分達が学べなかったことを学べた」「それぞれの病院の特徴がとてもよく分かった」「自由だったので幅広い意見が聞けた」などであった (表7)。

表7 平成26年度 学びや感想など (自由記載)

良かった点
・他グループの学びを共有することができ、自分たちが学べなかったことを学ぶことができた
・色々なグループの意見が聞けた
・いろんな病院での学びが聞けた
・それぞれの病院の特徴がとてもよくわかった。
・他の病院との違いを知ることができ勉強になった
カンファレンス方法について
・テーマがグループ毎に自由で、やり易かった
・自主的に行うことでカンファレンスを行いやすかった
・テーマが自由だったのがよかった。幅広い発表が聴けた
希望する点
・形式(項目)をある程度決めて、もっと統一して比較したかった
・事例を挙げ、行った援助から学んだこと等具体的にした方がわかり易い
・カンファレンスをするならば、事例を出して討論して、発表なら学んだことを発表した方が良いのでは
時期について
・カンファレンスは早めにしたかった。記憶のあるうちに
・カンファレンスは実習最後の学内を使って早くやってほしい

(2) 平成27年度

回収数は72件 (回収率100%)、有効回答72件 (100%) であった (表8)。

表8 平成27年度 研究対象

配付数	回収数 (%)	有効回答 (%)
72	72 (100)	72 (100)

内訳は女52人、男20人であった。母性と小児で同一の実習病院だった者26人 (36.1%)、異なる病院だった者46人 (63.9%) であった。(表9)

表9 平成27年度 対象者の属性

属性		人 (%)
性別	女	52 (72.2)
	男	20 (27.8)
実習病院	同一	26 (36.1)
	異なる	46 (63.9)

「発表準備への取り組みは積極的だった」は [まったくそうである] 38人 (52.8%)、[だいたいそうである] 32人 (44.4%) であり、“そうである”は70人 (97.2%) であった。「発表はグループで協力してできた」は [まったくそうである] 39人 (54.2%)、[だいたいそうである] 25人 (34.7%) であり、“そうである”は64人 (88.9%) であった。「グループワークではメンバーの一員として役割が果たせた」は [まったくそうである] 33人 (45.8%)、[だいたいそうである] 35人 (48.6%) であり、“そうである”は68人 (94.4%) であった。「発表では学んだことが伝えられた」は [まったくそうである] 30人 (41.7%)、[だいたいそうである] 39人 (54.2%) であり、“そうである”は69人 (95.9%) であった。「参加して学びが深まった」は [まったくそうである] 42人 (58.3%)、[だいたいそうである] 30人 (41.7%) であり、“そうである”は72人 (100%) であった。「カンファレンスの学びは有意義だった」は [まったくそうである] 22人 (30.6%)、[だ

表10 平成27年度 学生の評価

	まったくそうである	だいたいそうである	あまりそうでない	まったくそうでない	NA
	人 (%)	人 (%)	人 (%)	人 (%)	人 (%)
発表準備への取り組みは積極的だった	38 (52.8)	32 (44.4)	2 (2.8)	0 (-)	0 (-)
発表では学びを伝えられた	30 (41.7)	39 (54.2)	3 (4.2)	0 (-)	0 (-)
GWではメンバーの一員として役割が果たせた	33 (45.8)	35 (48.6)	4 (5.6)	0 (-)	0 (-)
発表はグループメンバーで協力してできた	39 (54.2)	25 (34.7)	5 (6.9)	1 (1.4)	2 (2.8)
参加して学びが深まった	42 (58.3)	30 (41.7)	0 (-)	0 (-)	0 (-)

いたいそうである] 40人 (57.0%) であり、“そうである” は62人 (86.2%) であった。(表10)。

実習病院混合グループでの学びは、「混合グループのグループワークでは積極的に発言できた」は「まったくそうである」26人 (36.1%)、[「だいたいそうである」38人 (52.8%) であり、“そうである” は64人(88.9%)であった。「混合グループでのグループワークでは学び

が深まった」は「まったくそうである」23人 (31.9%)、[「だいたいそうである」45人 (62.5%) であり、“そうである” は68人(94.4%)であった (表11)。

全体発表では、「全体発表や全体討議では、学びが深まった」は「まったくそうである」24人 (33.3%)、[「だいたいそうである」42人 (58.3%) であり、“そうである” は66人(91.7%)であった。「母性及び小児看護学実習の

表11 混合グループでの学び

N=72

	まったくそうである	だいたいそうである	あまりそうでない	まったくそうでない	NA
	人 (%)	人 (%)	人 (%)	人 (%)	人 (%)
混合グループのGWでは、積極的に発言できた	26 (36.1)	38 (52.8)	6 (8.3)	2 (2.8)	0 (-)
混合グループのGWでは、学びが深まった	23 (31.9)	45 (62.5)	3 (4.2)	0 (-)	1 (1.4)

表12 全体発表での学び

N=72

	まったくそうである	だいたいそうである	あまりそうでない	まったくそうでない	NA
	人 (%)	人 (%)	人 (%)	人 (%)	人 (%)
全体発表や全体討議では、学びが深まった	24 (33.3)	42 (58.3)	4 (5.6)	0 (-)	2 (2.8)
母性及び小児看護学実習の目的や目標が達成できた	25 (34.7)	45 (62.5)	1 (1.4)	0 (-)	1 (1.4)
母性及び小児看護学実習の合同カンファレンスは意義があった	22 (30.6)	40 (55.6)	8 (11.1)	1 (1.4)	1 (1.4)

表13 平成27年度 学びや感想など (自由記載)

良かった点	<ul style="list-style-type: none"> 自分が行った病院以外の特徴等を聞き比較することができ、治療など行われていないことについて学びを深めることができた 最後にまとめることで、学びの再確認ができた 母子のカンファレンスで理解を深め、自分たちの知らないことも知ることができた カンファレンスを行うことで、改めて学びを深めることができ良かった 病院によって異なる目的をもって入院してくる患者や産婦がいることを知り、パースプランやマザークラスに関わる看護をカンファレンスで学ぶことができたのでよかった いろんな施設の特徴が分かった(自分が行ってないところ) カンファレンスを通して異なる点、同じ点を知ることができた 他の病院の事についてなど、知らなかったことも共有することができてより良い学びを得ることができた 来年も、その次も是非続けて欲しいです。まとめをすることで、母子の実習がより理解できました 今回の発表はとても意義があり、参加して良かった。施設もグループ毎で違っていて学びや経験に差があることに不安を感じていたが、今回の発表で皆が実習でどのようなことを学んだのか共有でき、有意義な機会であった 他の実習でも合同カンファレンスで多くの学びがあった。母性・小児でも行って良かったと改めて思った 意見交換がたくさんできて良かった 自分が実習で行った病院以外の病院の特徴や特化している看護について学ぶことができた 母性・小児それぞれの実習を振り返ることで、実習で学んだ知識を定着することができた カンファレンスを通じて知らなかったことをたくさん知れて、背景を考えながら観察することの大切さを改めて学んだ
工夫が必要な点	<ul style="list-style-type: none"> 異なる施設での特徴を知ることで学びが深まった。発表内容を一致させた方がさらに学びが深まると考える 全体の発表後に質問だったため、質問しにくい 新グループの話し合いはいらぬかも、同じことの繰り返しだと思った 資料作成の時間が長かった。もう少し短くても良いかなと... パワーポイントで行うと見やすいが、みんなが資料作成に参加できなかった 午後の発表はだいたい午前中に発表しており「また同じことかな？」等重複するものもあった 午後の発表より、午前の発表の方が集中して興味深く発表をきくことができた 実習後に時間がたってからのカンファレンスであった為忘れていた部分があった 実習の後、あまり時間を空けずにまとめをしたほうが効果的ではないかと思う

実習目的や目標が達成できた」は「まったくそうである」25人(34.7%)、「[だいたいそうである] 45人(62.5%)」であり、「そうである」は70人(97.2%)であった。

「母性及び小児看護学実習の合同カンファレンスは意義があった」は「まったくそうである」22人(30.6%)、「[だいたいそうである] 40人(55.6%)」であり、「そうである」は62人(86.1%)であった(表12)。

合同カンファレンスの学びや感想として自由記載では、良かった点と今後工夫が必要な点の内容であった(表13)。

(3) 2年間の学生の学び

平成26年度及び平成27年度のカンファレンスで共通して実施したことは、実習グループ毎の発表であった。2年間の評価を集計した。「発表準備への取り組みは積極的だった」は「まったくそうである」63人(53.4%)、「[だいたいそうである] 52人(44.1%)」で、「そうである」115人(97.5%)であり、平成27年度は平成26年度より0.6ポイント減少していた(図1)。

「学びを発表で伝えられた」は「全くそうである」48人(38.1%)、「[だいたいそうである] 64人(54.2%)」で、「そうである」は112人(94.9%)であり、平成27年度は平成26年度より2.7ポイント増加していた(図2)。「グループワークでメンバーの一員として役割を果たすことができた」は「まったくそうである」60人(50.8%)、「[だいたいそうである] 53人(44.9%)」で、「そうである」113人(95.8%)であり、平成27年度は平成26年度より3.4ポイント減少していた(図3)。

「協力して発表できた」は「まったくそうである」72人(61.0%)、「[だいたいそうである] 38人(32.2%)」で、「そうである」は110人(93.2%)であり、平成27年度は平成26年度より11.1ポイント減少していた(図4)。

「参加して学びが深まった」は「まったくそうである」70人(59.3%)、「[だいたいそうである] 47人(39.8%)」で

“そうである”は117人(99.2%)であり、平成27年度は平成26年度より2.2ポイント増加していた(図5)。「学びは有意義だった」は「まったくそうである」42人(35.6%)、「[だいたいそうである] 66人(55.9%)」で“そうである”は108人(91.5%)であり、平成27年度は平成26年度より8.5ポイント減少していた(図6)。

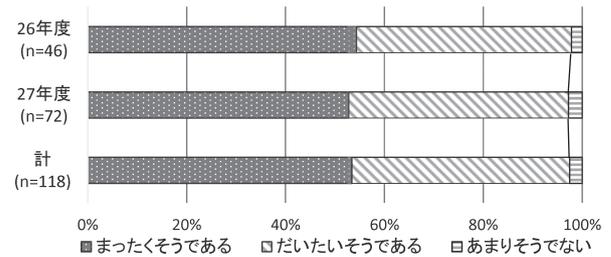


図1 発表への取り組み積極的だった

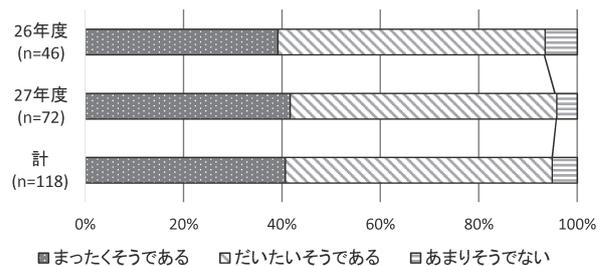


図2 発表で学んだことを伝えることができた

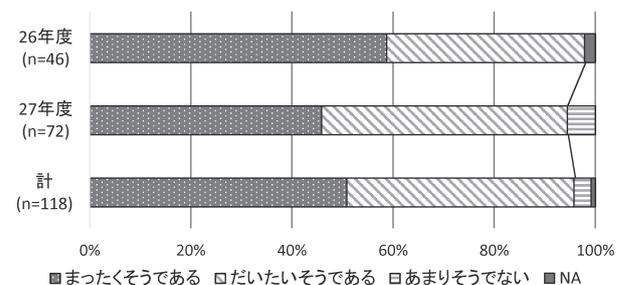


図3 GWでメンバーの一員として役割を果たせた

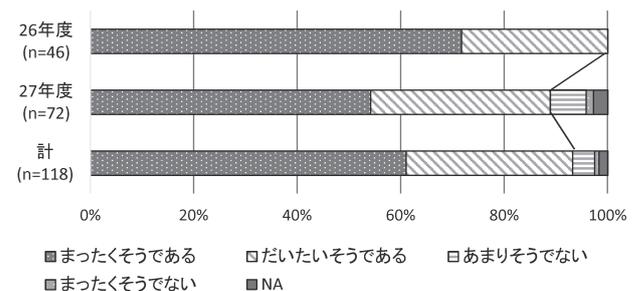


図4 グループメンバーは協力して発表できた

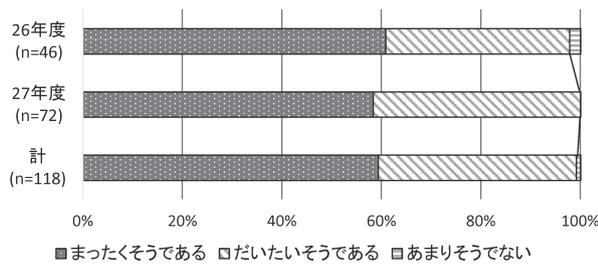


図5 参加して学びが深まった

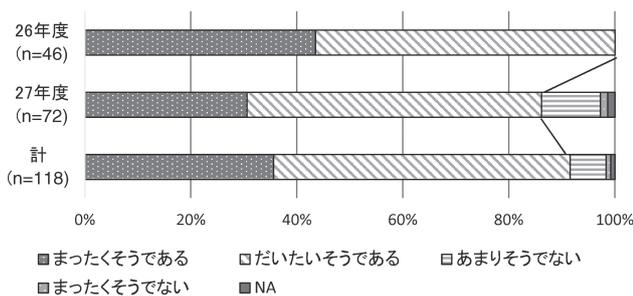


図6 カンファレンスでの学びは有意義だった

6. 考察

母性看護学実習と小児看護学実習の複数の実習病院が概ね同一病院だったため、各病院や患者・対象者の特徴、ケアの実際について合同でカンファレンスを行い、母性・小児看護学実習のまとめとした。3年次の実習期間を通して複数の実習施設に分散したため、3年次でのすべての実習終了後にカンファレンスを行った。

(1) 平成26年度

最も多いのは、「発表はグループで協力してできた」100%、「カンファレンスの学びは有意義だった」100%、「今後も合同カンファレンスは必要である」100%であった。次に「発表準備への取り組みは積極的だった」97.8%、「グループワークではメンバーの一員として役割が果たせた」97.8%、「参加して学びが深まった」97.8%の順であった。どの項目も高い割合であり、学生はカンファレンスではグループで協力して発表し、他のグループ

の学びを共有し有意義だったと捉えていた。

また、「合同カンファレンスの時期は適切だった」95.7%、「カンファレンスの方法は適切であった」95.7%であったが、自由記載で、「母性及び小児看護学実習後、早めにしたかった」という意見があったが、全体の实習終了後でなければ、各施設での振り返りができないためやむを得ないと考えた。「発表では学んだことが伝えられた」93.5%、「準備の時間は適切だった」87.0%でありカンファレンスの準備時間は課題だと考える。

(2) 平成27年度

平成26年度より学生数が増えたが、カンファレンスの時間数は平成26年度と同じ時間数で実施した。実習グループでの討議や発表準備の時間は同じであったが、母性と小児の発表後に、実習病院を混合したメンバーでのグループワークとまとめを行った。

実習グループ毎の学生の学びでは、最も多いのは、「参加して学びが深まった」100%であり、次に「発表準備への取り組みは積極的だった」97.2%、「発表では学んだことが伝えられた」95.9%、「グループワークではメンバーの一員として役割が果たせた」94.4%、「発表はグループで協力してできた」88.9%、「カンファレンスの学びは有意義だった」86.2%であった。

実習病院を混合したグループでの学びは、「混合グループでのグループワークでは学びが深まった」94.4%であり、次に「混合グループのグループワークでは積極的に発言できた」88.9%であった。実習グループよりも割合が低い結果であったのは、1年間通してのグループでのワークと直前に決まったグループでの討議との違いと考える。

全体発表では、「母性及び小児の実習目的や目標が達成できた」97.2%であり、次に「全体発表や全体討議では、学びが深まった」91.7%であった。

合同カンファレンスに対する意見で、「カンファレンス時期を早くしてほしい」があるが、実習計画上はやむを得ないが、カンファレンス内容や方法について早

くオリエンテーションをする必要があったと考える。

(3) 2年間の学生の学び

平成26年度と平成27年度を集計した結果、最も多いのは「参加して学びが深まった」99.2%であり、次に「発表準備への取り組みは積極的だった」97.5%、「グループワークでメンバーの一員として役割を果たすことができた」95.8%、「学びを発表で伝えられた」94.9%、「協力して発表できた」93.2%、「学びは有意義だった」91.5%の順であった。

2年間を通して、初年度である平成26年度の学生評価の方が平成27年度に比べて、概ね高い割合を示している。平成27年度の方が高い割合を示した項目は、「学びを発表で伝えられた」、「参加して学びが深まった」の2項目であった。調査した項目すべてで80%以上が[そうである]と答えていること、自由記載での学びからも、

まとめのカンファレンスを行ったことは母性看護学実習、小児看護学実習共に効果があったと考えられる。それは、異なる実習施設での老年看護学実習終了時にまとめをすることの意義が報告⁴⁾ ⁵⁾されていると同様と考える。

7. 今後の課題

複数の施設に分散して行った実習経験や学びが共有できたカンファレンスであった。しかし今後の課題として、次の3点の検討が必要である。①実習目標と直接関連させた発表内容とする②カンファレンス内容や方法についてのオリエンテーションを早期に行うこと③討議方法や発表時間の工夫。

今後も実習のまとめとして、より学びの深まるカンファレンスに取り組むことが必要と考える。

[引用・参考文献]

- 1) 厚生労働省医政局看護課. 母性看護学実習及び小児看護学実習における臨地実習について(厚生労働省医政局看護課長通知). 平成27年9月1日.
- 2) 日本医師会. 看護師等養成所における実習に関する調査結果について. 平成26年6月.
<dl.med.or.jp/dl-med/chiiki/kango/kango_h2606.pdf>アクセス2016年11月30日
- 3) 滝沢美智子. 臨地実習施設の広域化に伴う学生への影響. 上武大学看護学部紀要 第6巻第1号, 38 - 43, 2010.
- 4) 木下香織, 他. 2年次老年看護学実習における学生の学びと指導上の課題—実習のまとめのグループワークから—. 新見公立短期大学紀要. 第27巻, 67—77, 2006.
- 5) 出井理恵子, 他. 異なる施設での実習体験を共有する「老年看護学実習のまとめ」の検討—学生による評価の分析から—. 北日本看護学会誌, 16(1), 51-60, 2013.

